随想

一尺の厚み

佐伯市西上浦
会員　上杉清喜

ささやかな私の書棚の中に、ひときわ目立って並べられてあるのは、六冊の部厚いとじ物、それは「佐伯史談」の全集である。

終戦後、しばらく農村の「天祝い」という言葉を聞いた。戦後の食糧難時代、腹のふくれるものは、何でもかんでも金になった頃で、復員後二ワカ百姓を始めた小生には、同じ百姓でありながら、ついぞこの言葉のうま味は、味わえずじまいであった。

百円札を一尺の高さに積み上げる。古来金に縁の薄かった百姓にしてみれば、大へんな喜びであったことだろう。それは、身を粉にして働いた努力のせいでもあったろうが、また一面異常な時代の、いわゆる濡れ手に粟式の、珍現象であったことも、否めない事実であった。

この六冊の手製の製本を、ビッシリつめて測ってみた。なんと、丁度一尺ある。百円札の一尺祝いには縁がなかったけれども、今こうしてつみ上げた、いやつみ並べた横の一尺の厚み――。

貧乏百姓の悲しさ、それゆえ時たまにしか会合にも研修会にも出たことはなかったが、それでもページをめくっていると、躰で、脚で、当り、歩いたあの時、あの場所、あの光景が、なつかしく思い出されて、最も身近かな、最も生きた、一部には私の分身とも言える匂いのする本である。

三月二十九日　清

鶴岡郷土史研究会の諸氏見える予定につき、起床後家人総掛かりで屋内外の清掃、十時前、堅田の佐藤貫一氏先ず第一番手に到着、車（西上浦の車部落も来りて総勢十名、内七名を先導して河波城に登る。云々

これは昭和三十四年の春、佐伯史談会の前身、鶴岡郷土史研究会の皆様方を、部落の北に聳える河波城に案内した時の、日記の一節である。この日から、私と史談会とのつき合いが始まった。

あれから数えて、もうはや二十年になる。この二十年の厚みが、先程申し上げた「一尺祝い」である。

それにしてもこの一尺の厚みの中、どの巻か、どのページをめくってみても、その九十九%は羽柴先生の筆になっている。すべてガリ版ずりで、しかも小さな小さな、そして美しい見事な達筆で――。

一体全体、この一尺の立方体の中に収まっている文字の数は、どの位あるのだろう。おそらく気の遠くなるような数であるに違いない。年に一回、僅か二、三百枚の年賀状を書くことすら億劫なのに、あのお年で何処にそんな活力が潜んでいるのだろうか。只々感嘆する外はない。

先生はよく「好きだから」と申されているが、単なる物好きでは、このような大事業は今日まで続かなかったと思う。それは誰よりもこの佐伯を愛し、誰よりもこの郷土に誇りを持ち続けた、熱烈な愛郷心の賜物に外ならなかったからであろう。

そして一方、終始せまらず、訥々としてしかも大綱を

誤らず、この軍団の長としての高木会長とむかえている。この名コンビ！

私は、日露大戦の大山司令官と、児玉参謀のあの名組合せをいつも連想している。

「佐伯史談会」なる大軍団躍進の源は、どうやらこの辺にありそうである。四百とも五百とも拡がったこの大扇の要のゆるぐことなきよう、益々ご両氏のご健勝を祈り、そしてご健闘、お手引を乞い願って止まない次第である。

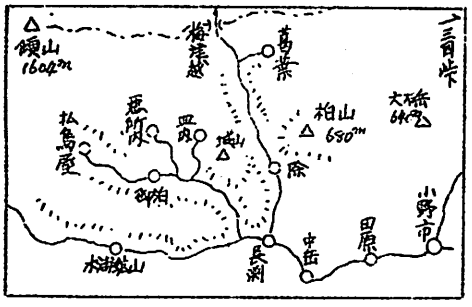
（おわり）

見聞記

宇目町西山地区を歩いて

羽柴　弘

宇目町での文化財関係の集会のついでに、小野市に宿泊、翌十二月一日、多年待望の西山を歩いた。それは全く軸丸氏のご厚意と、その運転なさる車に甘えながらのことであった。



九時半すぎ、車は長渕から川に沿うて、半ば舗装された林道を入る。南田原三重線の県道である。除の部落から先は、次第に谷川が低くなる。いや急勾配となり、視界はぐっと広がる。

さすがに大分県随一の玄大な山林資源を擁する宇目町、目の届く限り山また山、その悉くがナラやクヌギの黄葉、多少の波浪清濁で色どり賑やか、それがよく手入れの行届いた濃緑の杉の美林を懸鍛して、それが路傍から谷向う、その先重なる山々四方悉くである。このような景観、黄葉の展望は生れてはじめてのことであった。

道は右手御林の中に入り、谷間のくぼ地に数戸の農家があった。葛葉という部落で、数年前の「宇目町地図」では十数戸が数えられるが、今は現住四戸、豪壮な空屋と草茅の廃屋が一軒づつ目に止まっただけ。全く山村過疎の姿である。

しかし車を駐めた首藤家の老主人は、軸丸氏と旧知の間柄、快く迎えてくれ、家の横から裏の谷端にかけて、何百鉢かの盆栽の手入れの話がつづく。納屋をのぞいて見たらこの秋活躍したコンバインが、カバーの下に休んでいる。いずれにしても二、三反しか作らないであろうに。軒先には電燈線の外電話線もあり、テレビ受像の黒い太いコードも引かれている。なるほどと私は感心した。

ここまで来たのだからと、軸丸氏は車を梅津越の峠まで走らせる。向うは三重町の奥、稲積鍾乳洞が近い。

それから一旦長渕まで下り、西山川に沒うて西山の中心地帯に入った。そして御泊（おとまり）―松島屋（まつしまや）とめぐり、下って大瀬原から恵間（えま）と、城山に近い四内（しうち）とのぼった。

以上数部落をめぐって、共通していえることは、

○ほんの手のくぼ地どの谷間（たにあい）、しかし海抜三、四百メートル

○ゆず水田を開き、傾斜地ながら畑作に励んでいる。

○林業（椎茸・造林・山林労務）に働いている。

○氏神をまつっている（山神社、天満社が多い）

○電燈はもとより、電話・テレビの恩恵は下界並み。

○車がどの部落にも何台かある。道路はよい。

午後は真弓から鷹島屋神社へとまわった。